

末松廃寺跡の謎

末松廃寺は、白鳳時代の660年頃に創建された寺院で、創建当初は、東側に塔、西側に金堂という法起寺式といわれる伽藍配置でした。寺院は建物の配置等を変えつつ、平安時代の1000年ごろまで存続しました。

昭和14年に国の史跡に指定されています。 小冊子も参照



このジオラマはふるさと歴史館で展示されています



こんなジオラマをみたことがあるけど、
七重の塔が建っていたんだね

このジオラマは1966・67年(昭和41年・42年)の発掘調査の成果を基に作成され、七重の塔クラスの建物が建っていたらという想定を行っています。

この規模の塔が建っていたとした根拠の1つは、塔の基壇の大きさです。塔の基礎部分である基壇の大きさから考えて、このくらいの大きさがあつたらうと考えられています。



想定ということは、本当のところはわからないということなの？

七重の塔が建っていたという文字資料が残っているわけでもないのに、実際のところどんな大きさの塔が建っていたのかはわかりません。さらに言うと、実際に建っていた塔は瓦葺であつたと思われませんが、塔の発掘調査では瓦は全く発見されていません。(金堂に葺かれていた瓦は、金堂周辺から大量に出土しています)



もしかしたら未完成だった可能性もあるのかな？

その可能性もありますし、「完成していても瓦が葺かれていなかった」「七重ではなくもっと小さかった」など、いろいろなことを考えることはできますが、今はこれだと確定する証拠はありません。ただ、この塔跡からは平安時代につくられた瓦質の塔(瓦塔)が出土しているので、寺院における塔の役割を持った場所であつたということは間違いのないでしょう。

Info: 塔心礎の保存修理について

塔の中心には、柱を受けるための大きな石(=心礎)が残っています。この心礎について表面が劣化してきたため保存修理を実施し、修復と劣化防止を行いました。



保存修理の様子